

Alert 28号

反天皇制運動

[通巻 410 号]

2018年
10月 16日発行

第2期・反天皇制運動連絡会

反天日誌 * 16
野次馬日誌 * 11
集会情報 * 16
集会の真相 * 13
学習会報告 * 15

●天皇制の終りにしたい天皇制 * 27

—— オウム真理教元幹部らの死刑執行で —— 中嶋啓明 * 4

—— 天野恵一 * 10

●天皇が「神格」をえる（カミとなる）儀式をめぐつて —— 〈壤憲天皇明仁〉 その25
●日本首脳会談共同声明から見抜くべきこと —— 太田昌国 * 9

●反天連パンフ『Alert!!』「代替わり」状況へ —— 高橋寿臣 * 8

●『ブラックボランティア』 —— 八月の太陽のもとで —— 暗黒聖闘士 * 7

●天皇制の「みたび夢は夜ひらく」 —— 太田昌国 * 10

●天皇制の「マスクミじかけの天皇制」 —— 高橋寿臣 * 3

●本当に終わりにしたい天皇制 * 2

○ 今月の Alert



6月28日、神戸朝鮮高級学校の生徒たちが修学旅行で朝鮮を訪問し日本に戻ってきたとき、関西空港での税関検査で、朝鮮の親戚などからもらったお土産を没収（税関は「任意放棄」と称する）されるという事件が起った。在日朝鮮人社会はもちろん、韓国社会でも問題となり、7月3日には、ソウル日本大使館前で250余団体の賛同のもと、抗議の記者会見が行なわれ、9月12日に「大半」を返還するという報道がなされたが、14日には別の学生団体が没収されている。

日本は2006年、朝鮮のミサイル発射訓練、核実験を口実に、万景峰92号の入港禁止措置など、日本単独の「制裁措置」を行ない強化してきた。朝鮮と日本の間のヒト、モノ、力ネの動きを遮断しようというものであるが、もともと日本と朝鮮の間に大きな経済的関係があったわけではなく、「制裁」は、在日朝鮮人に対するイジメとして、その生活に大きなダメージを与えてきた。万景峰92号が入港禁止になったことにより、飛行機での移動が困難な高齢者や障害者、病弱な人々は、実質的に祖国との往来が閉ざされてしまった。朝鮮高校生の祖国訪問も、飛行機便への変更により大きな負担増となっている。日本の学会が朝鮮との間で行なっていた学術誌の交換も禁止され、相互の学術交流ができない状況である。「制裁」開始後、在日朝鮮人に対する民族差別、迫害行為が多発した。拉致問題以降、日本社会に形成された「反朝鮮・反総聯」の風潮が、「制裁」によって増幅され、在日朝鮮人に直接の暴力が向けられた。

これらの「制裁」は、国際法・人道法上の制約を逸脱して在日朝鮮人の人権を侵害しており、ただちに廃止されるべきである。日本は自らの植民地支配責任を清算した上で、日朝の国交正常化に努めなければならない。（ぐずら）

●定期購読をお願いします（送料共年間4000円）

●郵便振替 00140-4-131988 落合ボックス

東京都千代田区神田淡路町1-21-7 静和ビル2A 淡路町事務所気付 落合ボックス
TEL/FAX 03-3254-5460 URL <http://hanten-2.blogspot.jp/> mail: hanten@ten-no.net

●最新情報はこちら▶ <http://www.ten-no.net/>

250円

今月の

Alert**本当に終わりにしたい天皇制**

ひたすらに嫌な話が続く中での、沖縄県知事選、辺野古新基地反対の玉城デニー圧勝。沖縄の人々による粘り強い運動が、安倍を追い詰めている。しかしヤマトはどうしてこうなのが、忙しく動きながらも、やはりじつくり考えていくべきだ。

今月も取り上げるべき課題は多いのだが、古くなりつつある杉田水脈衆議院議員の「LGBT生産性なし」発言をめぐり少し触れておきたい。『新潮45』二〇一八年八月号で、杉田議員は「LGBTのカッフルのために税金を使うことに賛同が得られるものでしょうか。彼ら彼女らは子供を作らない、つまり『生産性』がないのです」等々を書き連ねた。杉田発言への批判は噴出・炎上し、その後援護射撃的拍車をかけた特集を組んだ『新潮45』は更に炎上。九月二一日、新潮社社長は「謝罪ではない」のコメント付きで「認識不足」等の声明を出した。そして、二五日、「このような事態を招いたことについてお詫び致します」という、誰への謝罪かまったくわからぬ声明とともに、『新潮45』の事実上の廃刊を発表した。

発言内容もこの幕引きも問題だが、そもそもこの手の発言がこれまで何度もくり返されていること 자체が問題である。石原慎太郎元都知事の「女性が生殖能力を失つても生きているつてのは無駄で罪です」、いわゆる「ババア」発言（二〇〇一年）。森喜朗元首相の「子供を1人もつくらない女性の面倒を、税金でみなさいというのはおかしい」（二〇〇三年）、柳沢伯夫元厚労相の「女

性は生む機械」発言（二〇〇七年）。麻生太郎元首相の「（自分には）子どもが二人いるので、最低限の義務は果たした」（二〇〇九年）、山東昭子元参院副議長の「子供を四人以上産んだ女性を厚生労働省で表彰することを検討してはどうか」（二〇一七年）。これらは、国や都の上層部にいる者たちの発言である。そのたびに、大きな批判の声が上がり、辞任を迫られたり裁判を起こされたりしているが、発言の主は誠意のない撤回と謝罪、あるいは間違った解釈・報道であると非難し、今回は掲載紙を廃刊させて居直り続けていた。提訴された石原を裁判所は、発言は「不用意」と指摘するのみで原告敗訴。司法も同じ穴の住人だ。

どうして、女はこうも「子どもを産むこと」でその価値を計られるのか。

日本国憲法第二条には「皇位は、世襲のものであつて、国会の議決した皇室典範の定めるところにより、これを繼承する」とある。その「皇室典範」第一条には「皇位は、皇統に属する男系の男子が、これを繼承する」とある。世襲制と男系男子。そうやって継承される天皇を、この国と「国民統合」の象徴と憲法は定めているのだ。女が産むことで維持される国の制度。石原、杉田らの発言はむしろ天皇制に依拠しているとさえいえる。

しかし、杉田らが暴言・妄言を発する時、天皇制を意識していたかといえどもなにもかもしれない。天皇制であろうとなかろうとしてカウントし、人権なんて無視だ。「産

来年五月から皇后となる雅子は、子どもを産まないことで苦汁をなめてきた。同情し応援するのは勝手だが、それでも応援して天皇制を残したければ、石原や杉田たちと同じ穴の住人とならざるを得まい。

安倍は再選し、就任早々の柴山昌彦文科相が「（教育勅語は）今の道徳などに使える」が「（教育勅語は）今の道徳などに使える」を発言。また繰り返しが始まつた……。今月二三日、政府は「明治一五〇年」記念式典を開催。政府はどうあっても我が道を行くだけだ。だけど、私たちもやる。二二日は政府式典反対デモだ。二五日には安倍靖国参拝違憲訴訟控訴審判決もある。「即位・大嘗祭違憲訴訟」も準備が進んでいる。反戦・反基地・反差別の行動も呼びかけられている。一一月は「終わりにしよう天皇制」の集会。チラシ等お見逃しなく！ そしてみんなで出かけよう。本当に終わりにしたい。

（桜井大子）

裏切り者と英雄のアイコン

歴史認識問題を無視するマスク

祭だ！御輿だ！天皇制だ！

この夏三十九年ぶりに『暗殺のオペラ』を劇場で見た（ベルナルド・ベルトルッチ監督／一九七〇年／於・東京都写真美術館）。舞台は六〇年代のイタリアの架空の田舎町。来訪した主人公は、一九三六年に起きた父親の暗殺の真相に迫ろうとする。町には父親の名を冠した通りや公共施設、反ファシズムの英雄としての胸像も建つが、年老いた住民たちは事件の究明を阻む。最後に彼は、暗殺は父親自身が計画し、同志たちの手で実行されたという証言にたどり着くが、それはこの町の誰もが知る暗黙の了解事項だった。

初めて見て圧倒された甘美な映像による謎解きが、今回は妙に生々しい戦後史への問題提起に思えた。住民を巻き込んだ大芝居によつて生まれた英雄神話が、抵抗グループだけでなく、ファシスト支持者だった大地主にとってすら、共通の「戦後」に繋がるための韁帶としてあるからだ。

帰り道、かつての風情をなくしたケベイアメリカ橋が見えたとき、嫌な予感が。この国の戦後のスタート地点にはどんなアイコンが設置されていたのだろう。まさかあの、軍服のノップとヨビ髪の写真？ やめてくれ、ヴィットリオ・ストラーロのカメラワークにもうしばづく酔つていたいんだから。

（捨てられし猫）

都議会九月議会に東京五輪「人権」条例提出。九月二六日の共産党代表質問で小池都知事が取りやめた関東大震災朝鮮人追悼文に対し聞かれ、小池都知事は以下答弁した。

「関東大震災におきます朝鮮人虐殺に関するじますが、この件はさまざまなもの内容が史実として書かれていると承知をいたしております。何が事実かにつきましては、これまで申し上げてきましたとおり、歴史家がひもとくべきだと考えておりまして、私は東京都知事として、東京で起つた甚大な災害と、それに続くさまざまなもの事件で亡くなられた全ての方々に対しまして、哀悼の意を表するところでございます。」

小池都知事は関東大震災並びに都内戦災遭難者慰霊大法要で犠牲者全てに追悼の意を示していると言ふが、朝鮮人犠牲者追悼文にあつた「多くの在日朝鮮人の方々が、いわれのない被害を受け、犠牲になられた」という事件は、わが国の歴史の中で最もに見れる、誠に痛ましい出来事でした」旨の記載はない。

施設利用制限の歯止めとなる審議会は知事の意向が強く反映される仕組みであり、この「人権」条例がどう利用されるか推測できる重要な発言を報道しないマスク。

私たちも、この時代に生きている。（宮ト守）

隣町に賣い物に出かけて祭と遭遇した。駆前のロータリには、すでにいくつもの御輿が点在している。御輿の集結場なのだな、と思いつながら商店街に入ると、前方から笛や太鼓との独特のかけ声も聞こえてくる。なんだ、まだ終わっていなかつたのか……。

いつのころからか、この空気で恐いものを感じるようになっている私は、早くやり過ごそうと歩きを速めたが、御輿が近づいてくると狭い商店街は息苦しいほどで埋まり、自由に歩けない。御輿を担ぐ人々の顔も、上下に揺れる御輿も、目の当たりに迫り来る。そして目に入ったのが「天皇陛下在位30年奉祝」とかいう御輿からぶら下がる赤い縁取りの白い細長い布。

このあたりにはいいぞれだけの町内会と神社があるのか、驚くほどいくつもの御輿とそれ違う。一度見てしまつた白い布。すれ違うすべての御輿にぶら下がつていた。

ねじりはちまきの御輿を抜き練り歩く人たちのは、天皇奉祝の札も担ぐ。それを眺める人たちの目にも、私が目にしたように「在位30年奉祝」が焼き付く。なるほど、これが日本の形、天皇制なのだ、とあらためて思い知る。伝統・文化という名の天皇制。祭を好きな人は多い。いつたいどうすりやいいのだ？

（橙）

状況 批評

思想・状況・批評

あらためて裕仁の戦争責任を考える ——オウム真理教元幹部らの死刑執行で

中嶋啓明

(人権と報道・連絡会)

七月六日朝、職場で死刑執行の速報を聞いた。驚いた。旧オウム真理教の元幹部らに対する執行だった。近いと言っていたが、それでもまさかと思つた。

刻々と速報が続き、それを現在進行形で実況するテレビの報道に、さらに驚いた。直接的な映像がないだけで、さながら人殺しを生中継しているような報道だった。気分が悪くなつた。

「地下鉄サリン事件」をはじめとした一連の事件で死刑が確定していったのは一三人。そのうち七人がこの日、執行された。残る六人の執行は二六日。どんな気持ちですごしたのだろう。

最初の執行の前日、法務大臣の上川陽子は、例の「赤坂自民亭」に参加し、首相安倍らと共に酒盛りに興じていたという。おぞましいと言うほかない。

安易に原稿の執筆依頼を受けたものの、私自身は元幹部らと何のつながりもない、一連の事件を継続的に取材してきたわけでもない。そんな自分に何が言えるのかとのためらいは、今も頭から消えない。

旧オウム真理教の信者は、事件に関与していない『末端』の人まで述べて、すさまじい人権侵害にさらされ続けている。彼らは文字通り、日本の国家、社会にとつて憲法外の存在なのだ。そうした状況については、私もこれまでそれなりに取材を続けてきた。彼らが置かれた状況かは、私もこれまでそれなりに取材を続けてきた。彼らが置かれた状況か私はそう強く感じている。

そうした立場からここでは、今回の執行を受けてあらためて考えたこ

とを、思いつくままに記してみたい。それでご容赦願いたい。

残された多くの「闇」

前置きが長くなつた。

今回の処刑に対しては、事件の全容解明が不可能になつたと批判が上がつていて。

その通りだろう。けれども、心神喪失状態だった元教祖に適切な治療を施し、裁判を再開して語らせるべきだったとの主張に接すると、ちよつと待てよと思う。刑事被告人に認められているはずの黙秘権はどうなるんだと。もちろん、話せるのなら話してほしい。だが、被告人という立場に置かれている以上、供述が強制されることがあつてはならない。

元幹部らがそれぞれ、一連の事件になんらかの形で関与していたのは間違いないのだろう。何も知らず、そのまま教団に残つた現在の信者らもその後、一定程度明らかになつた事実を前に団体としての関与を認め、果たすべき責任に誠実に向き合おうと苦悩を続けている。

だが、それらを踏まえた上でなお、未だ解明されていない多くのナゾが残されたままであるのは間違いない。

元教祖の一審の弁護団は最終弁論で「各種の鑑定や証拠から、散布されたものがサリンかどうか立証されていないし、被害者らが、サリン中毒により死亡したり重症になつたりしたとの十分な立証はなされていない」と指摘していた。

元教祖と「地下鉄サリン事件」は、「リムジン謀議」で結び付けられている。

確定判決は、同事件が起きた九五年三月二〇日の二日前、東京から山梨県上九一色村（当時）の施設に戻る際のリムジンの中で、元教祖の指示で地下鉄にサリンをまく計画が決まり、共謀が成立したと認定した。元教祖の犯罪事実として描かれる構図の核心部分だ。

この共謀は、同乗していた実行犯とされた元幹部の証言をもとに認定された。この元幹部もまた、今回処刑された一人だ。

だが、この元幹部に対する裁判の一審判決では、証言の信用性が疑われ、「リムジン謀議」の成立は否定されていたのだ。「リムジン内においては、いまだに本件（地下鉄サリン事件、以下同）の実行が決定されていない上、被告（元幹部、以下同）に対して本件の現場指揮をとることや、本件の補助をすることなどの指示が抽象的な形であっても何ら示されでおらず、被告と元教祖らとの間に共謀が成立したとみるには無理がある」（要旨、（一）内は筆者、元教祖は本文では実名）と。

旧オウム真理教の周辺では当時、一連の事件に関連して多くの不可解なことが相次いだ。

最たるものは、警察庁長官狙撃事件だろう。この事件の捜査は、多くの誤認逮捕の被害者を生みながら結局、時効を迎えて終わった。その過程では、催眠状態に陥られた元信者を名乗っていた警察官が、自分が狙撃したとしてその状況を再現し、それがテレビで放映されるなどといつた、不気味な「闇」の存在をうかがわせるに十分な事実もあつた。この警察官が、その後どうしているのか不明だ。拳句、警視庁は何の証拠もないまま、旧オウム真理教信者の犯行だと断定する見解を公表して批判を浴びた。この事件では今も、無関係な別の人間の関与が、根強くささやかれ続けている。

同様に一連の事件の最中、東京の教団施設の前で当時の最高幹部が、「暴力団」関係者によって刺殺された。この男性に犯行を指示したとし

て殺人罪で起訴された元「暴力団」幹部の男性は、当初は主犯格と目されていながら、実際には無実だったことが裁判で明らかになった。男性はそれからももなく、別の企業恐喝事件で容疑を掛けられ、否認しているにもかかわらず、何度も再逮捕が繰り返されている。

元教祖の裁判は、一審の審理だけで終わつた。控訴趣意書の提出をめぐり、弁護側と裁判所が合意して約束した期日の前日にいきなり、東京高裁は趣意書の未提出を理由に控訴を棄却、裁判を打ち切つた。よほど事実が明らかになるのを嫌つたのだろう。

公安警察や自衛隊の謀略機関などの関与がちらつく一連の事件の不可解さは、挙げればキリがない。

元教祖の弁護団は今回、「リムジン謀議」を否定する別の同乗者の証言を得て再審請求していた。処刑された計一三人のうち一〇人が再審請求中。先の「リムジン謀議」を証言した元幹部も、再審を請求したばかりだつた（再審請求中の執行については、あらためてその違憲性、違法性を問う裁判が起こされている）。

再審請求の過程で、先のようない闇の一端に再び光が当てられるのは許されない。それが権力の意思だつたのではないかと疑わざるを得ない。

【平成の事件は平成で】

さて、天皇制とのかかわりについても触れなければならない。

今回の執行について、明仁がいつ、どのような形で知つたのか。これをこの警察官が、その後どうしているのか不明だ。拳句、警視庁は何の証拠もないまま、旧オウム真理教信者の犯行だと断定する見解を公表して月三日、皇居・宮殿で予定された昼食会に検事総長らと共に招かれていた。ただ、この昼食会は、明仁の体調不良で延期された。二回目の執行の前日二五日には、検事総長ら認証官の任命式が行われている。今回は

計一三人。他方、一九一〇年の大逆事件では一二人だった。

一回での処刑人数が大量であるがなかろうが、命を断たれる側の死刑囚にとって、その残酷性に変わりはない。それを踏まえた上で、大逆事件との相似性についても、いさざか無理やりの感はあるかもしれないが触れておきたい。

大逆事件で一二人が処刑されたのは、元号で言うと、明治の四四年。明治天皇の最晩年の時期に当たる。糖尿病が進行し、歩行に困難をきたすほどに体調を崩していた天皇の代替わりも、支配層の間では視野に入っていたらう。大逆事件は、民衆の間に高まりつつあった社会主義への期待に冷や水を浴びせようと企図し、フレームアップされた事件だつたとされる。

一方、安倍政権の周囲には常にスキンダルの腐臭が漂い、左翼・リベラル層から攻撃されるだけでなく、足下の右翼・反動層からさえも離反の動きが常にささやかれる。明仁、美智子は左翼に取り込まれたとして、「醜の御盾」であるはずの右翼・天皇主義者たちからさえ愛想をつかされ、頼りない次期天皇・皇后にも不満の声は絶えない。自分たちの希望を託せるはずだった秋篠宮「家」までも、眞子の結婚相手をめぐる醜聞などがそうした状況に追い打ちをかけている。

代替わりの過程の中で、支配層 支配体制に搖らぎが生じ、それに対する不信感が、民衆の間に広がり続けるかもしれない。一度、権力の怖さを見せつけておいた方がいい。さて、どうするか。目の前には利用できる格好の材料がある。何せ、彼らは「国民の敵」なのだから。今回の執行の背景事情として、あながちありえない想定ではないだろう。

メディア上では、「政府関係者」が「平成の事件は平成のうちに」と語っていたなどと、まことしやかに報じられた。

破壊活動防止法の適用「失敗」とそれを受けた団体規制法の制定等に象徴されるように、一連の事件を境に、治安管理体制の再編、強化は一段階を画した。一連の事件は、「平成」史の中で、ある種のターニング

ポイントとして位置づけられるものだったのだ。

代替わりから東京五輪にかけて、次代の天皇制が迎える国家イベントを目前にして、治安管理体制の再編、強化は今後、より高次の段階に進める必要がある。ならばその前段階には、一応の区切りをつけておかなければならぬ。「平成の事件は平成のうちに」とは、そんなことを意味しているのだろうか。

刑事責任と政治責任

最後に少し。私は普段、日本国家と旧オウム真理教、天皇と元教祖の相似性について、積極的に語ることは控えている。事実をよく知らないからだが、そもそも基本的で、本質的な違いもあるようと思う。一方は国家そのもの、死刑を執行する側であり、他方は国家内の存在で、いざとなれば今回のように処刑される側にすぎないからだ。刑法法を適用する側とされる側の違いだ。ただ、表層的な外形事実の相似性を踏まえた上で、考えなければならない論点もあるよう思う。

一審東京地裁での最終弁論で、元教祖の弁護団は要旨、次のように述べていた。

「被告自身には、宗教家・教祖としての責任があるが、それは刑法上の『謀議責任』とはまったく別のものだ。『謀議』に関する証拠に基づいて、二つの責任を峻別していくことこそが、審理の本来の主題であつたはずだ。しかし検察官は、被告が宗教家であるという事実を切り捨てることによって、二つの責任という主題を初めから切り捨てた」。

刑法上の責任と、組織の長としての政治責任は峻別されるべきとの趣旨だろう。

裕仁の戦争責任を考える上でも、避けて通ることのできない視点が示唆されているように思う。今後も考え続けていきたい。



『プラツクボランティア』——八月の太陽のもとで 本間龍（角川新書）

暗黒聖闘士（おことわリンク）

「あなた方は、八月の暑さをしらないだろう。照りつける太陽が体をむしばみ、頭を混乱させ、たたかう気力などまったくしなわせてしまうことをしらないだろ。」——『八月の太陽を』（乙骨淑子、理論社）

九月末から東京オリパラのボランティア募集が始まっている。大会ボランティア八万人、都市ボランティア三万人の計一二人。『プラツクボランティア』（本間龍、角川新書、二〇一八年七月）は、開催費の暴騰、新国立競技場建設を巡る混乱、選手村用地の不當譲渡疑惑、招致活動における賄賂疑惑などを列挙し、「招致時に呼ばれた『復興五輪』のかけ声は、建設業界を中心に、五輪特需に沸く東京への人手と資材の集中を生み、もはや被災地の復興を遅らせていることが明らかになつてゐる」と指摘する。

そして「その中で、私が最も大きな問題と考えているのが、本書で扱う『無償ボランティア労働搾取』である」と述べ、これを「酷暑下で展開される未曾有の『やりがい搾取』と喝破し、組織委員会や東京都が募集する無償ボランティアの問題点を、客観的なデータや組織委員会とのやり取りを交えながら訴える。その他にも多くの興味深い論点はあるが、私が惹かれたのは、第二章「史上空前の商業イベント」で紹介されているIOCや組織委員会による「五輪ビジネス」についてである。

五輪の商業化が一気に進んだのは八四年のロス五輪以降という話は、同大会を取材したスポーツ

ジャーナリストの谷口源太郎さんの幻の名著『日の丸とオリンピック』（文藝春秋、一九九七年）等に詳しいが、総経費三兆円以上といわれる今回の東京五輪も巨額のスポンサー料金とテレビ放映権料によって支えられている。世界中で五輪マークを使用できる「ワールドワイドパートナー」（WWP）になるとには四年契約で年間一〇〇億円程度と言われるスポンサー料をIOCに支払う必要がある。WWPは一業種一社のみで、現在一三社がIOCとWWP契約をしており、トヨタ、パナソニック、ブリヂストンの三社が日本企業、他にアメリカ六社、イスラエル、韓国、中国が一社ずつ。この他に国内組織委員会には、国内スポンサーからの収入がある。〇八年北京大会の一四六〇億円、一四年ソチ冬季大会の一五六〇億円から、二〇二〇東京五輪では五〇四〇〇〇億円以上に膨張（詳細は非公開）。企業はボランティア精神ではなく、もうかると考えてスポンサー料＝広告代を払う。著者は、巨大商業イベントになり果てたオリパラのボランティアは有償とすべきであり、それが無理なら電通やスポンサー企業が社員を派遣すればスッキリすると訴える。

これを読んで思い出したのが、史上初めての黒人奴隸らの蜂起によって奴隸制を廃止したハイチ革命を描いた『プラツク・ジャコバン』（C.L.R.ジエムズ、大村書店）。そして本書評の冒頭で紹介した一句は、このハイチ革命を描いた児童文学『八月の太陽を』の一節で、黒人奴隸の指導者トゥサンが、

迫りくる強大な英軍を前にして仲間に語ったセリフだ。トゥサンは続けて言う。「われわれは、もっと暑さのきびしい八月のある日に総攻撃をかける。イギリス軍は、暑さと、とつぜんの総攻撃に、あわてふためいて逃げゆくのだ。そしてふたたび姿をあらわすことはあるまい。」

二〇二〇年の八月の太陽のもと、プラツクボランティアやプラツクアスリートらのオリパラ奴隸たちは、それを支えるのが「プラツクボランティア」と呼ばれ、一萬ものオリパラ奴隸たちである。本書を

はじめ「プラツク」という呼称でネガティブさを表現することが流行りのようだが、民衆の鬪いの歴史を振り返れば、「プラツク・パンサー」や「プラツク・ライヴズ・マター」など、むしろ肯定や抵抗的な意味合いでの呼称が常識。昨今の「プラツク」呼称の風潮は、批判対象の五輪に最初から倫理面で負けていると言えなくもない。それを意識してかどうかは分からぬが、著者は「おわりに」のなかで、アメリカの黒人学者のミリ・バラカ（リロイ・ジョーンズ）の「奴隸は、奴隸の境遇に慣れすぎると自分の足をつないでいる鎖の自慢を始める」という言葉を紹介している。

これを読んで思い出したのが、史上初めての黒人奴隸らの蜂起によって奴隸制を廃止したハイチ革命を描いた『プラツク・ジャコバン』（C.L.R.ジエムズ、大村書店）。そして本書評の冒頭で紹介した一句は、このハイチ革命を描いた児童文学『八月の太陽を』の一節で、黒人奴隸の指導者トゥサンが、迫りくる強大な英軍を前にして仲間に語ったセリフだ。トゥサンは続けて言う。「われわれは、もっと暑さのきびしい八月のある日に総攻撃をかける。イギリス軍は、暑さと、とつぜんの総攻撃に、あわてふためいて逃げゆくのだ。そしてふたたび姿をあらわすことはあるまい。」

二〇二〇年の八月の太陽のもと、プラツクボランティアやプラツクアスリートらのオリパラ奴隸たちと団結して蜂起せよ。



反天連パンフ『Alert!!「代替わり」状況へ』

高橋寿臣

今年の七月末に行われた、PP研の連続講座「平成代替わり」で、私も報告者の一人だった。私が担当したのは「昭和Xデー」に対する反対運動の体験・経験について。最後の方で、これらと比べても、現在進行形の「平成代替わり」に対するたかいは、様々な点で困難である（周知のことではある）ことを述べた。とてもあの時のような人々の結集はできないだろうということなのだが、では、どうするのか、どう考えるのか、ということになる。私が最後に述べたのは、「（極）少数派たらざるを得ないのは以前から分かっていたこと、反天の闘いは、どんなに小規模なうが必要なデモをやり続けること、何が問題なのか、たえず、また、ポイントごとに声明やアピールを発し続けること、それが長い目でみても意義・意味を持つであろうこと……」というようなことで、結局、「現在の反天連がやっていることがまったく正しい」と結論づけた。まあ、「内輪ばめ」かも……。

今年八月一五日に発行された本パンフは、反天連の久しぶりのパンフ『最新のパンフで、機関紙“Alert”の二〇一六年七月号から一八年四月号まで掲載された「主張や見解」、天野恵一の連載「マスコミじかけの天皇制』が収められたものである。初めの数か月は、「アキヒト退位表明」から始まつた「代替わり過程」への衝撃が、色濃く反映されている。にもかかわらず、このことの意味するもの』問題点を的確に指摘しているのは、「さすが」である。アキヒト（+ミチコ）の目指した「再定義さ

れるべき象徴天皇制」と安倍右翼政権の思惑の違いがリアルにわかる。退位＝禅讓・譲位の自由権を確保しようとする（皇室典範改正？）アキヒトらと、憲法上の「建前」等をもつて「一代限りの特例法」で対処しようとする政府。そのいわば「せめぎ合い」の中で、実際の「天皇の退位等に関する皇室典範特例法」が制定（挙国一致！）されいく。一つの肝は、特例法でありながらアキヒト以降の「退位・禅讓」も可能としている点であろう。「象徴天皇制は私たち（皇室）のもの」という「意向」に、安倍らが「妥協」せざるを得なかつた、と推測される。背景にあるのは「退位意向」に対する「多数の国民の同情共感」があるとしていることだ。このことはある意味、アキヒトの目指したもので、まるでどこかの商店か同族会社の高齢の社長が引退して「ご隠居」となり、息子にその地位を譲る、という話であるかのようにして、庶民的な「共感」を得ていくことに成功した、といえる。政治的機能は有していないとしても象徴天皇は現憲法に規定された「國家機関」である。従つて、退位・禅讓は表明したアキヒトの政治意志である。そのことにより新たな法律が創られるということは明確な「政治権限の行使」で、「憲法違反」。その問題をクリアする手段として使われているのが「国民大多数の共感（総意ではないぞ）」で、これは象徴天皇制を永続させようとする、最強の武器、である。本パンフでは、ここらの違憲性や問題点を暴き出しているが、ほとんど「黙殺」される極少数派。さらに「国民の共感」は、安倍政治を批判する人々に、それに対抗しているアキヒト・ミチコへの期待・

贊美という倒錯を、広範に生み出している。本パンフ全体を通しての、もう一つの大きなテーマは、反天皇制運動が直面している「民主と人権・諸運動」における「代替わり問題」の無視・軽視、反天課題「持ち込み」への警戒感、アキヒト贊美傾向等々をめぐつてである。昭和Xデー闘争のような広がりをもちえない（だろう）という、予測の根拠でもあるが、ここは要するに「原点に立ち返つて」構想と展望を考えていく、ということしか、ないと思う。まあ「少数派根性」といわれてしまえばそれまでだが、反天皇制運動は、戦後日本社会において大きな大衆運動として展開されてきたわけではない。あの昭和天皇に対してさえ、それなりの大衆運動らしくなったのは、「Xデー」が近づいた八〇年代で、反天連の活動を基盤としたものであった。象徴天皇制というこの扱いにくい「政治制度」に切り込んでいった反天連、天野の努力は、今日も生き続けている。

私たちには「民主主義に天皇制はいらない」という主張を獲得し、その根拠の一つに「貴族あれば、賤民あり」という古くからの反差別思想があることをアピールしてきた。これが心ある人々に受け入れられる機会は、きっと広がる。このパンフで示し続けてきたよな、主張・アピールを、今後も続けていくこと。以前にもまして役に立つていない（生産性のない！）私ですが、できる限りのことはやり続けます。

*九月三〇日、沖縄で玉城デニーが勝ってくれた。奮闘を続ける沖縄民衆に敬意を表します。

移民や難民の入国規制や禁止を求めて欧州各国に台頭しつつある排外主義的な政治勢力を、正しくも「極右政党」と表現するメディアは、日本に成立した今次安倍政権を「極右政権」と名づけて報道しなければならないのではないか。「日本会議」と「神道政治連盟」に加入している政治屋たちが居並ぶ閣僚名簿を見て、かつ彼（女）らのこれまでの発言を思い起こして、つくづくそう思うのだが、これが偽りのない日本社会の現状なのだ。私たちは、ここで考え、発言し、叫び、飛び、転がり、駆け、座り込み、動き回るしかないのでと覺悟して、久しい。

衝くべき問題は、いくつもある。ここでは、去る九月二七日に行なわれた日米首脳会談が孕む問題に触れよう。共同声明の発表を受けて、日本での報道では、「日米物品協定交渉入り合意」（九月二七日毎日新聞）、「日米、関税交渉入り合意」（同日朝日新聞夕刊）などの見出しが躍った。詳しく読むと、記者会見で日本国首相は、「今回のTAG（物品貿易協定）は、これまで日本が結んできた包括的なFTA（自由貿易協定）とは全く異なる」と強調している。これは、從来から、日米二国間

に台頭しつつある排外主義的な政治勢力を、正しくも「極右政党」と表現するメディアは、日本に成立した今次安倍政権を「極右政権」と名づけて報道しなければならないのではないか。「日本会議」と「神道政治連盟」に加入している政治屋たちが

のFTA交渉を行なうことはあり得ないと否定してきた首相の立場に即せば当然のことだが、しかし、交渉翌日の新聞は「事実上のFTA」（毎日新聞）、「実態FTAに近い」（朝日新聞）との見出しを付したように、マスメディアによつても問題の本質は疾うに見抜かれていたのである。

一〇月四日、東京新聞が共同声明のホワイトハウス発表の英語版および、在日米国大使館による仮翻訳と日本政府訳を並列し、食い違つてゐる問題点を指摘した。私自身も原資料に当たつて、検討してみた。すると、「東京」紙も指摘しているところだが、日本政府が公表した声明文で「日米物品貿易協定（TAG）」となつてゐる個所は、United States-Japan Trade Agreement on goodsとなつており、使用されている大文字と小文字の関係性から言えば、goodsはTrade Agreementと同格の位置にはないから、「物品貿易協定」と熟語的に翻訳することには無理があることがわかる。英語本文では、「TAG」の略称も用いられてはいない。しかも、on goodsの後には,as well as on other key areas including services,と続いており、「物品」と「サービスを含めた他の重要な分野」を同格と捉えた表現になつてゐることがわかる。こ

みたび

太田四國の夢は夜ひらく 101



わせた翻訳文にするのだから、政府と官僚たちは、森友・加計問題で駆使した文書捏造技術にさらに磨きをかけるつもりなのだろう。

だが、この翻訳「技術」には既視感がある。一九九九年、新たな国際情勢の下で日米両政府が「防衛協力のための新ガイドライン」について協議していた。まとめられたガイドラインの正文（英語）と、政府から発表された日本語訳を読み合わせると、微妙だが、明らかなズレが見られる。

ふたつの文章は實際には厳密な対応関係ではなく、日本語文は、語る内容から「軍事色」を消すことなく腐心していると私には思えた。いざ「周辺事態」が発生した時に自衛隊は米軍に「物品および役務を提供」する「後方支援」に従事することになるにもかかわらず、日本語文からは「戦争の匂い」が消えているのだ。この日米協議の場に出席していた防衛庁・陸幕調査部一等陸佐、山口昇氏（現在は防衛大学校教授で、「軍人スカラ」）と呼ばれている）が公開の場で講演するというので、當時聞きに行つた。氏の話を直接聞いても、ふたつのテキストを読んだ時と同じ感想を持つたので、私は「ガイドラインがまぎれもない戦争マニュアルであること」を隠そそうとしているのではないか、と質問した。見解の相違で、そんなつもりはない」と氏は断言した。だが、日本語文は英語正文からの翻訳ではなく、討論を経てふたつの言語で同時に起草したことは認めた。（二国間の共同声明や協定が、こんな風に処理される場合もあるようだ。現在の権力者たち（政府+高級官僚）の論理と倫理の水準に照らして、今回の日米共同声明を厳しく解説すべきだろう。（一〇月六日記）

マスコミ
げけの
天皇制 27

天皇が「神格」をえる〈カミとなる〉儀式をめぐつて ——〈壊憲天皇明仁〉その25

天野恵一

「……つまり、これ以上はまちがいないものを「内廷費で挙行できる規模にできないだろうか」と話しているのだと」というのだ。

九月一日・二日は、再稼働阻止全国ネットワークの全国相談会に参加。この茨城県（水戸市）で持たれた第二二回「全国相談会」は首都圏老朽・被災原発の二〇年延長を許さない闘いを、さらにどう広げていくかを集中的に論議する場となつた。もちろん、全国の反原発の声を合流させることで再稼働をストップさせる多様な闘いを展望するための、北海道から四国、九州まで原発立地の闘いの情報交換会、討議会もして、今まで四年未だ、

べくつくりだされ、今、「新元号反対署名」に取り組んでいる人たちの集まりである。そこでテキストは『季刊ピープルズ・プラン』の八一号。私の責任編集の『象徴天皇陛下』万歳の『反安倍（リベラル）』でいいのか』特集。正直、動きすぎでヘロヘロ、ドクターストツプ状態であつたが、参加。それでも、活発な討論が聞けて、楽しい集まりであつた。

キチンと果たされながらである。論議は、時間的に不足という状態はあいかわらずだが、発言者はほぼすべて、整理したレポートを提出ずみで、参加者はそれを手にしながら話を聞くというシステムも、うまく定着し、実にスムーズに報告と論議が進行するようになつてゐる。そして報告内容も、自分の足との原発が、他地域の原発と、どうい

が載つた。

八月二五日の『毎日新聞』に、実に奇妙な記事
聖』か『象徴』か、いかなる『国家神道』か」と
いうタイトルで、的確な批判を書いている)。

島薦の一人、島薦進の最近の発言をここでは取り上げたい(島薦については北野薦がその雑誌で、「『神

いる『反安倍政権』リベラルの代表的イデオロギー

るかを考へながらのレポートだ。司会をしながら、私はその点も実感した。フクシマ（3・11）は忘れられつつあるというマスコミに流れる情報とは反対に、そこには、したたかに深化し拡大しつつ持続している反原発運動の実態が、力強く示されていた。もちろん、次の大事故まで、もうあまり時間がないのでは、というリアルな危機感こそが、そのバネになつてゐるのだろうが。

「来年5月に即位する新天皇が五穀豊穣（ほ
じょう）を祈る皇室の行事「大嘗祭（だいじょう
さい）」について、秋篠宮さまが「皇室祭祀（さい
し）に公費を支出することは避けるべきではないこと
か」との懸念を宮内庁幹部に伝えられていること
が関係者への取材で判明した。大嘗祭は来年11月
14日から15日にかけて皇居・東御苑での開催が想
定されている。政府は来年度予算案に費用を盛り
込む」（傍線引用者）。

九月二三日・二四日は神奈川県（平塚市）で、反天皇制運動のグループの「合宿」に参加。「代替り状況」下で、より広く各地のグループが交流す

その記事は、今年の天皇家の内廷費（私費）といわれている）は三億二四〇〇万円であるが、「平成」の時は総額二二億五〇〇〇万以上かかってお

言葉である
宮廷費（「公費」とされている）だろうが内廷費だらうが、どちらも税金という公費だ。そして國の象徴と位置づけられている男が「神格」をえる「カミ」になる皇室神道としては最重要な儀式が「私事」を形式的に位置づけられようと、国家的公共性がないわけがあるまい。それは憲法二〇条（政教分离原則）破壊の行為だ。この原発被曝列島の「平和」を讀えながら、新天皇は「カミ」になる。「國家神道」は、さらにこのように象徴天皇の中を生き続けるのではないか？ 島蘭宗教学はどうしてこんなあたりまえの事實を無視するようになつたのか？

「秋篠宮さまは、新天皇が即位すると、皇位繼承順位第1位の皇嗣となる。同庁幹部は秋篠宮さまの懸念について、毎日新聞の取材について『承知していない』としている」（傍点引用者）。

取材したら、知らないと言われたと書きながら、「秋篠」は「幹部」にこう言つたと大々的に記事にする。普通ではありえない。「生前退位」に向かう天皇家の〈国費の無駄遣いに心をいためる天皇家〉という、国民向けイメージアップの政治がそこにあらざる。こんなあからさまな国政介入。憲法が禁じている発言ゆえに「秋篠」の言葉にして、知らない振りをしてリーケしてみせたのだ。そこにある識者コメント。「『皇嗣』となる方の率直な意見として歓迎したい。大嘗祭に公的な費用が使われることは、国の宗教的な活動を禁じる憲法20条に抵触する恐れがあり、本来好ましくない」。島薙の言葉である。

一野次風日誌

8月31日～9月30日

[8月31日]

宮内庁概算要求◆宮内庁が、2019年度予算の概算要求を発表。皇居・御所の改修費など代替わりの費用は19億円を計上。代替わりに伴う体制整備のため、職員36人の増員を求める。これにより、翌年5月以降の側近部局は、退位後の明仁、美智子を担当する「上皇職」が65人、新天皇一家の「侍従職」が75人、皇嗣となる秋篠宮一家の「皇嗣職」が51人となり、新天皇一家が移り住む皇居・御所の改修費として7億円を盛り込む。要求総額は210億円で、18年度当初予算比1.4%減だが、年末にまとめる予算案には事項要求分が上積みされ、明仁、美智子が皇子一家と入れ替わりで住む東宮御所の改修費は、20年度予算に盛り込む予定のほか、秋篠宮邸は、21年度までに33億円程度をかけて増改築する方針で、今回はうち一部の2億円を計上したと報道。ほかに皇室ゆかりの美術品などを収蔵、展示する「三の丸尚蔵館」の建て直し費用の一部7億円を盛り込む。

[9月2日]

佳子◆茨城県つくば市にあるつくば国際会議場を訪れ、世界各国の高校生らがプログラミング技術を競う大会「第30回国際情報オリンピック」の開会式に出席。追悼する大法要に出席。

[9月3日]

新元号◆政府が翌年5月1日に改める元号に関し、「明治」「大正」「昭和」「平成」の頭文字をアルファベットで表記した「M」「T」「S」「H」との重複を避けた方向で検討していることが分かつたと報道。

[9月4日]

明仁、美智子、紀子、悠仁◆悠仁が12歳の誕生日を迎えたとして、明仁、美智子にあいさつをするため、紀子と共に皇居・御所を訪れる。半蔵門から皇居に入る。

[9月5日]

明仁、美智子◆最大震度7を観測した北海道の地震で多くの被害が出ていていることを訪れ、翌年で日本とオーストリアが外交関係樹立150年を迎えるのを祝うバージョンコンサートを鑑賞。

[9月6日]

雅子、愛子◆静養先の栃木県那須町の那須御用邸付属邸から帰京。

【8月31日～9月30日】

徳仁◆7日からの初めてのフランス「公式訪問」を前に東宮御所で会見。自身が目指す次世代の天皇像について、明仁の考え方や活動の在り方を基礎とした上で「日本と世界の人々の幸せを祈りつつ、自分に何ができるかを常に真剣に考えていくたい」。「国際親善」のための外国訪問について「皇族が果たすべき役割の中で重要な柱の一つ」。

[9月9日]

徳仁◆フランス・ブルゴーニュ地方サントネのワイナリー「ドメーヌ・フルーロ・ラローズ」を訪れ、ブドウ畑やワインの貯蔵庫を視察。夜、内務大臣主催の夕食会に出席。

秋篠宮が就任することが関係者への取材で分かる。

秋篠宮、紀子◆1923年の関東大震災から95年となり、東京都墨田区の都立横網町公園内の慰靈堂で営まれた犠牲者を付属邸から帰京。

徳仁、雅子、愛子◆徳仁が、静養のため滞在していた栃木県那須町の那須御用邸を訪れて特別展「建築の日本展」を鑑賞。明仁◆宮内庁が、7月の西日本豪雨の被害を受け、各国の元首らから送られた見舞いの電報に対し、明仁が謝意を示した電報をそれぞれ返信したと発表。

明仁、美智子◆東京都港区にある森美術館を訪れ特別展「建築の日本展」を鑑賞。明仁◆宮内庁が、7月の西日本豪雨の被害を受け、各国の元首らから送られた見舞いの電報に対し、明仁が謝意を示した電報をそれぞれ返信したと発表。

秋篠宮、ラグビーの2019年ワールドカップ（W杯）日本大会の名譽総裁として、パリ近郊の日本人学校を訪問。国民議会

校を訪問。

秋篠宮◆ラグビーの2019年ワールドカップ（W杯）日本大会組織委員会が開いた理事会で、大会の名譽総裁に、秋篠宮が就任することが報告される。

秋篠宮◆ラグビーの2019年ワールドカップ（W杯）日本大会組織委員会が開いた理事会で、大会の名譽総裁に、秋篠宮が就任することが報告される。

秋篠宮◆ラグビーの2019年ワールドカップ（W杯）日本大会の名譽総裁として、パリ近郊の日本人学校を訪問。国民議会

徳仁、雅子◆前年7月の九州北部の豪雨で大きな被害を受けた福岡県朝倉市で復興状況を視察。仮設住宅で同市や隣の東峰村の被災者らと懇談。

高御座◆新天皇の即位を国内外に宣言する翌年10月22日の「即位礼正殿の儀」で使われる玉座「高御座」が、保管先の京都市の京都御所から皇后に陸路で搬送される。新皇后が使う「御帳台」も。京都御所で25日午前から、高御座と御帳台の積み込み作業が始まり、約3千のパーツに解体、トラック8台に載せ深夜、出発

したと報道。

【9月27日】

明仁、美智子◆宮内庁が、明仁、美智子が、「全国豊かな海づくり大会」の式典出席

するため、10月27日から2泊3日の日程で、高知県を訪問すると発表。

徳仁、雅子◆東京都千代田区のホテルで開かれた「国際青年交流会議」に出席。

徳仁が懇談会に出席。雅子は参加しなかつたと報道。

【9月28日】

明仁、美智子◆在位中最後となる国体の

美空の「眞理相」 おことわリンク・映像講座

私たち2020「オリンピック災害」おことわり連絡会（略称「おことわリンク」）は、武藏大学の永田浩三さんのコーディネートのもと、同大学で講座「オリンピックは誰のため？何のため？——過去の映像が私たちに語りかけること」を催した。

第一回は九月八日「通底する動員の構造1940～2020」。ます東京五輪が戦争のため中止となつた一九四〇年前後のニュース映画と、「今日甦る！幻の東京オリンピック」（テレビ朝日、八八年）を

読み解く」で、三六年ベルリン五輪と六四年東京五輪の記録映画をとりあげた。民族の祭典／美の祭典（リーフェンシュタール、三八年）については永田さんが紹介し、三六年ベルリン五輪が

技法やその影響、政治と美学をめぐる論争などを解説。「東京オリンピック」（市川、六五年）については天野さんが、完成後組を谷口源太郎さん（スポーツジャーナ

リスト）が解説する。戦後については永田さんがNHK映像で六四年東京五輪への道のりをたどり、谷口さんが「だれのためのスポーツか」（英BBC、九二年）

で「勝利至上主義」「変わらアマチュアリング」「ビジネス化の功罪」「テレビによる支配」など現在に至るスポーツの問題点を明確化。天野恵一さん（おことわりリンク）が一九四〇年＝皇紀二六〇〇年とファシズム体制などをめぐってコメントした。

第二回は九月一六日「『政治』と『芸術』」（2020「オリンピック災害」おことわ

り連絡会／宮田仁）

大軍拡と基地強化にNO！アクリヨン2018集会

総合開会式に出席するためとして、羽田空港の特別機と陸路で福井県入り。石川県

明仁在位30年◆超党派の国会議員連盟と

小松空港に到着後、陸路で福井県に入り、坂井市の県教育総合研究所教育博物館を訪問。

【9月30日】
1日早く帰京。

明仁在位30年◆超党派の国会議員連盟と財界などが主催する明仁の在位30周年を祝う祭典が、翌年4月10日に東京・隼町の国立劇場で開かれることが分かる。明仁、

美智子の結婚60周年の記念日に当たり、2人が出席する方向で、与野党議員らによる「奉祝国会議員連盟」と、経団連幹部らが参加する「奉祝委員会」がそれぞれ11月までに発足し、演目などの調整を進めると、複数の関係者が明らかに。

【9月29日】

明仁、美智子◆福井市の福井県国際交流会館で国体関係者らと共に昼食。総合開会式が行われる県営陸上競技場に移り、国体開催を盛り上げる式典を見学し、開会式に出席。開会式後に大会関係者と面

会。台風24号の影響で、陸路と特別機で

「芸術」として擁護した声に対し、非「政治」性こそ動員を促すと、リーフェンシュタール作品にもつながる問題を提示する。

さらに谷口さんが、市川作品には出てこないインドネシアと朝鮮民主主義人民共和国の選手団引き揚げなど、六四年五輪がまねいた多くの「災害」についてコメントした。

「おことわり」連続講座は、2020オリンピック中止をめざして、まだまだづく。

9・11学習討論会」を開催した。参加者は三三名。

まず三つの報告、吉沢弘志（パトリオット・ミサイルはいらない！習志野基地行動実行委員会）「二〇一九年度概算要求の概要」、木元茂夫（すべての基地にNO！を

ファイト神奈川）「二〇一九年度防衛予算海上自衛隊は何をやろうとしているのか」、横山哲也（語らびや沖縄もあり練馬）「奄美の現状、概算要求から見る南西諸島軍拡」を受けた。吉沢からは、過去

最高の五兆二五五一億円もの概算要求の概要と共に、防衛省が基にしている「統合機動防衛力」などの「考え方」についても報告を受けた。木元からは「いざも」の本格空母への改装は先送りされたもののイージス艦の改装を進め、米第七艦隊との「共同巡航訓練」を急拡大している海上自衛隊の現状が報告された。横山は、「防衛力の在り方検討会議」などで中の論争のなかで同作を「政治」と無縁の

の方針が出された二〇〇四年頃から今につながる動きが始まること、やろうとしていることは八〇年代の「ソ連脅威論」に基づいた「シーレーン防衛・三海峡封鎖」を「南西諸島シーレーン防衛・南シナ海防衛」に焼き直したものであることを指摘し、海洋基本法や奄美振興予算を使って基地建設を奄美に受け入れさせていたる状況の報告がなされた。

一八日には、大軍拡予算に反対する防衛省申し入れ行動を行った。暴風雨の中、一八名の参加を得た。

一二月一五日、講師・大内要三さん（ジャーナリスト）、テーマ「現在と新しい防衛大綱」（仮）で、「改憲を先取りする新しい『防衛大綱』に反対する12・15学習・討論集会」（仮）を文京区民センターで開催する予定だ。本予算案を踏まえた防衛省交渉も考えている。今後の取り組みに、注目とご参加を訴える次第である。（大軍拡と基地強化にNO！アクション 2018／池田五律）

PPP研連続講座 ピックと『生前退位』 東京オリン

九月一五日、ピープルズ・プラン研究所（PP研）主催の「平成」代替わりの政治を問う、連続講座第七回が開催された。この回のタイトルは「東京オリンピックと生前退位」——ナショナリズム大いべントがねらうもの」。問題提起者は、宮崎俊郎、小倉利丸、天野恵一と、本紙ではお馴染みの顔ぶれだった。

宮崎さんからはオリンピック反対運動の視点に立った問題提起。オリンピックが「平和の祭典」と観念されることによつて、監視社会、ナショナリズムなどがオリンピック招致・開催によって醸成・強化されている現実を批判させない社会が作り上げられていることを、具体例をあげながら指摘した。いま話題となつてゐるボランティアについては、ナショナリズム批判の視点から「ボランティアとして国家行事に動員していくことに意味がある」とことへの批判の重要性を語った。この間の反オリンピック運動についてのまとめた報告も。

小倉さんは、「明治一五〇年」の断絶と継続という問題提起から始まり、この国の人、「天皇制等々について言及。そして、國や「國民」の虚構性と、そこによつて立つ「日本人」というアイデンティティ、その虚構をベースにしたナショナリズムへと話は進む。オリンピックの問題は国別という枠組自体にあること、敵・味方意識の再生産をとおして「國民」「國家」に収斂していくイデオロギー装置があり、国際スポーツは「平和」を装いながら戦争の感情を正当化すると批判。

最後に反天連の天野から。先のお二人の話の共通点としてあつた、オリンピックと天皇制のもつタブー性（批判を許さない）という共通性の指摘を受けて、一九九七年の長野冬季五輪反対運動の経験から問題提起。オリンピック批判の記事に入れた、天皇を揶揄する形で描かれていた挿し絵（貝原浩の漫画）が掲載不可となり争つた経験などを紹介した。

その後の議論も大いに盛り上がつた。
(反天連／大子)

生前退位、何が問題か 第4回 学習会「道徳」教育に潜むもの！

（③）教育出版が載せた「アイヌのはこり」（文化面に偏る補習教材だが）を使ってのアイヌ民族の現状を知り、共生の課題を摸索してきた「道徳」の「特別の教科道徳」化で出てきた「別葉」（他教科での道徳の扱い方を記述）は食わせ物だが、「道徳」は必要」との立場から、新教材「およびないりすん」（单元・ともだちとなかよく）を使っての実践報告の後に、レジュメ「道徳」教育に潜むもの（万世一系の天皇制護持か」と「道徳の内容の歴史 1890～2015）や国定教科書第五期関連頁など貴重な資料を用意されての北村さんのお話を聞き、最後に道徳自主編成の限界等を巡る議論をしたが、「道徳」の教科化は大事件！」と訴える北村講話の要点を、押さえたい視点として箇条書きして、報告したい。

（①）教育勅語と教育基本法が併存できるという考え方に対する危機感から、（④）「アスリートの頑張りを見習え」「あいう障害者だといいね」と差別助長的になりすん」（单元・ともだちとなかよく）を使っての実践報告の後に、レジュメ「道徳」教育に潜むもの（万世一系の天皇制護持か」と「道徳の内容の歴史 1890～2015）や国定教科書第五期関連頁など貴重な資料を用意されての北村さんのお話を聞き、最後に道徳自主編成の限界等を巡る議論をしたが、「道徳」の教科化は大事件！」と訴える北村講話の要点を、押さえたい視点として箇条書きして、報告したい。

（②）教育勅語と教育基本法が併存できるという考え方に対する危機感から、（⑤）「よりましまな」教科書採択に後退してきた取り組みは、検定を廃し、自由出版・自由採択・しかも無償を目指し、「道徳」教育教科そのものを返上する運動へと発展させよう。

（日の丸と君が代の法制化と強制に反対する神奈川の会・東京／大友深雪）

天皇代替わりと民主主義の危機 ——関西連絡会が集会

九月二七日午後六時半から、エルおさか南館ホールで、「天皇代替わりに異議提出八九年に徳目二項中に「孝行」があり関西連絡会」の主催で、「天皇代替わりと民主主義の危機——主権在民と政教分離に反する天皇代替りを問う」と題して、横田耕一さん（九州大学名譽教授・憲法学）の講演集会を開催した。

この日は、「朝鮮学校無償化裁判」の控訴審判決が大阪高裁であり、一審の判決を覆し、「北朝鮮の影響下にある」として、無償化の対象からの除外を合法とする極めて不当な逆転敗訴の判決があり、同時に集会があつたにもかかわらず、一七〇名余もの参加をいたいた。

横田さんからは、「生前退位メッセージ」を発した天皇に圧倒的多数の人々が共感しているという現実を押さえておくべきである」との指摘がなされ、憲法をきちんと読んで反論できるようにならないと説得的な反論はできない、天皇制に反対する論拠をきちんととそれぞれがもつ必要があるとも話された。

五〇年代の大衆天皇制と現在は大きく様変わりしており、「親しみをおぼえる」から、若いたちには尊敬の対象となつてゐる。

【学習会報告】 安丸良夫『近代天皇制像の形成』

(一九九二年、岩波書店)

今回（九月二十五日）は標記の本を取り上げた。

この本は、近代天皇の絶大な権威がどのように作られたかと問い合わせた。天皇自体からよりも、天皇の権威を必要とする人びとが作ったのだと答える。本書の論理は次のようにある。幕末・維新期に、支配権力樹立に向かう國家指導集団及び自らの指導する村落に秩序を取り戻したい

村落指導勢力は、この時期、内外から迫る体制の危機に面して、おりから社会全体に拡がる民衆の民俗信仰世界が持つ反秩序のエネルギーを鎮圧し、秩序の諸原上昇した。

こうして近代天皇制は国民的に受容される社会的基盤を得、超越的な権威として働く。しかしそれは内に包みこんだ民衆の本来反抗性をもつエネルギーとの矛盾を潜在させることになり、現代にまでわたって反天皇制の契機がここに求められることになる。

著者のこの見方に對して、近代全体を

このとき先頭に立たされたのが、秩序の根源と想定される天皇、國体の権威である。彼らはこれをあらるべき国家の文

明化の方向に結びつけ、これをもつて「愚

宿中央、柏木、西戸山、花園西）から一

集合できる公園を、これまでの四カ所（新宿区は八月一日から、デモのために

て、天皇制＝天皇教を無化するためには、「一人一人がお互ひを大事にする」。人権が我々の中に本当に定着したら、天皇なが我らの中に本当に定着したら、天皇なんか飛んでいくてしまう。「天皇はけしからん」といついても何もも解決しない、「天皇はいて当然」「差別があることを当然」とする私たち一人一人の意識を変えないと天皇制をなくせない、と締めくくられた。

そして「天皇とはいつたい何なんだろう」「天皇はなんで人々にこんなにうけるんだろう」ということを考えて、天皇をどうやってなくせばいいだろうかという

九月二九日、新宿区による集会・デモの公園使用制限に抗議する新宿デモ、集会が行われた（主催・集会・デモくらいではあったが、幅広い分野から七〇人が参加して、東口アルタ前から繁華街を通つて区役所前では抗議のコールを叩きつけた。日本キリスト教会館の集会（二六〇名）では、鵜飼哲さんが、レイシズムと治安管理、オリンピックの問題をからめて提

て一方的に決定した。この事態に急きよ

実行委を立ち上げ、新宿区みどり土木部

公園課に申し入れ、九月一八日には折衝

の場が持たれた。いかなる理由でデモ規

制に踏み切ったのかと問い合わせると、「(地

域住民や商店会から) デモが迷惑との声

が増えている。交通規制や騒音で買い物客も迷惑している。(公園の周りには) 予

備校やホテルもある。(残つた中央公園

は) 人がいない所だから良いだろう」と

いった、およそ自治体の対応とは思えな

い、表現の自由を侵害して平然としてい

ている状況がある。また「開かれすぎて

いる」「皇族が減っている」「天皇祭祀の

ないかと、提起された。

新宿区は八月一日から、デモのために

まつた。

